

ノートルダム清心女子大学におけるトランスジェンダー学生 受け入れに関するインタビューの解説と考察

安東由則¹⁾

要旨

2023年12月にノートルダム清心女子大学において実施したインタビュー記録(本号に掲載)の解説及び補足を行なうとともに、カトリック教会系の女子大学がトランスジェンダー女性の受け入れを決定し、実行した意味について若干の考察を行なった。

2023年度より、カトリック教会系のノートルダム清心女子大学はトランスジェンダー女性の受け入れを開始しており、短期間で受け入れの決定を行なった。カトリック教会は、一般にトランスジェンダーに対して厳しい対応をしてきたが、この大学で迅速に受け入れを実行できたのは、津田葵学長のリーダーシップが大きい。さらに、大学が取り組んできた学生個人へのきめ細かな対応の伝統が、トランスジェンダー女性受け入れという新たな課題にも対応していけるとの自負に繋がっている。

ただ、事前に行なっておくべき教職員と学生双方に対するトランスジェンダーに関する研修や意見聴取、さらに大学の方針や対応について、事前準備が十分にされていない点で、課題があると思われる。

キーワード：トランスジェンダー学生、学長のリーダーシップ、カトリック教会系大学、
学生へのテラーメイドの対応

目次：

はじめに

1. トランスジェンダー女性受け入れ議論に至る経緯
2. 多様な学生受け入れ委員会の発足から公表まで
3. 「多様な学生受け入れガイドライン」の策定
4. 受け入れ決定後の学内における対応・準備
 - (1) 教職員や学生、同窓会への説明
 - (2) FD / SD 研修の実施、学生への啓発活動
 - (3) 施設の準備
5. 当該大学におけるトランスジェンダー女性の受け入れ過程の特性

おわりに

引用文献

1) 武庫川女子大学教育総合研究所・教授

はじめに

(1) 本インタビューの目的と実施経緯

2020年度より、科研費研究(20H01639/23K20173)として「大学におけるトランスジェンダー学生受け入れ課題」をテーマとする調査研究を実施しており、共学大学でのトランスジェンダー学生への支援状況を調査するとともに、トランスジェンダー女性の受け入れを実施、あるいは表明した女子大学の関係者へのインタビューを実施してきた。2024年度現在、日本の女子大学71校中、受け入れを実施しているのは、国立2校(お茶の水女子大学と奈良女子大学)、私立3校(宮城学院女子大学、ノートルダム清心女子大学、日本女子大学)、2025年度から受け入れを始める大学は私立1校(津田塾大学)となっている。アメリカにおいては、女子大学の大多数が、受け入れ基準は多少異なるが何らかの形でトランスジェンダー女性を受け入れるようになっている¹のに対し、日本では来年度から受け入れを始める津田塾大学を含めても、日本の女子大学71校中、6校で実施されるに過ぎない。

本科研費研究では、これまでトランスジェンダー女性の受け入れを決定した3つの女子大学(宮城学院女子大学、奈良女子大学、日本女子大学)の関係者にインタビュー調査を行ってきた。これらの大学に続き、トランスジェンダー女性の受け入れを発表したのが岡山市のノートルダム清心女子大学である。この大学は、2020年6月に日本女子大学が受け入れを公表した2年後の2022年6月、トランスジェンダー女性の受け入れを表明した。表明から実際の受け入れまでの期間が他の女子大学よりも短く、10ヵ月後の翌年(2023年)4月から受け入れを始めたのである。さらに、この大学はカトリック教会系の女子大学であり、トランスジェンダー学生を受け入れることに宗教的な側面から抵抗があるのではないかと推察したが、速やかにトランスジェンダー受け入れを決断、実行した。よって、ノートルダム清心女子大学においてトランスジェンダー女性の受け入れについての議論と準備を担った関係者にインタビュー調査を実施することとした。手続きは以下の通りである。

2023年6月中旬、津田塾学長宛に研究の目的とインタビュー調査実施を依頼したところ、6月下旬、小林謙一副学長より承諾の返事をいただき、日程調整を始めた。諸事情により日程調整を何度かした後、インタビューの実施は同年12月21日となった。インタビューでは、本研究の目的を説明し、録音と本誌掲載の許可を得た上で、予め送付しておいた質問項目に沿って実施した。

インタビュー参加者は、ノートルダム清心女子大学から、2023年度より副学長として多様な学生受け入れ委員会の委員長を務められている小林謙一教授、学務部長として受け入れ準備に関わってきた小田久美子教授、後述する「多様な学生受け入れ委員会」発足時からのメンバーである中井俊雄准教授、事務局より「多様な学生受け入れ委員会」の発足時からのメンバーで、大学の同窓生でもある施設企画管理部長・大倉恭子氏と学務部事務長・土師裕子氏に参加していただいた(以上、調査当時の役職)。調査者は、研究代表である安東由則と共同研究者の中尾賀要子(武庫川女子大学)である。

(2) ノートルダム清心女子大学について

ノートルダム清心女子大学は、岡山市に所在するカトリック系女子大学であり、その起源はフランスのナミュール・ノートルダム修道女会(Sisters of Notre Dame de Namur²)が1924(大正13)年に、

¹ Schiappa, Edward 2021. *The Transgender Exigency*, Routledge, 57-58 頁。

² このカトリック修道女会は、フランスのジュリー・ピリアート(Julie Billiar)とフランソワーズ・ブラン・ド・ブルドン(Françoise Blin de Bourdon)によって1804年、フランス革命が引き起こした混乱によって苦しむ子どもたちの苦難を軽減し、貧しい子どもたちに基礎教育を施すことを目的として創設された。この使命は後継者に引き継がれ、フランスに限らず世界中の女兒に教育を与えるべく、大きく広がっていった。アメリカのワ

イエズス会が経営していた清心高等女学校を引き継いだことに始まる。清心高等女学校の前身は、1886（明治19）年にシヨファイユの幼きイエズス会が岡山で初めての私立女学校として開校した岡山女学校である。イエズス会が宣教区変更により岡山を離れることになったので、1924年にアメリカのナミュール・ノートルダム修道女会から岡山市に派遣されたシスター6名がこの学校経営を引き継いだ³。第二次世界大戦中の1944（昭和19）年には、シスターが強制収容される苦境にありながら、中国・四国で初めての女子専門学校である岡山清心女子専門学校を開校した。この女子高等教育機関が、ノートルダム清心女子大学の前身である。

第二次世界大戦後の1949（昭和24）年、帰校したシスターらの情熱と努力により、新制大学としてノートルダム清心女子大学が設立された。同年に創設された広島女学院大学とともに、中国・四国で初の女子大学が誕生し、この地域における女子高等教育の先駆、リーダーとして地位を今日まで保持している。大学は学芸学部のみ1学部（英文学と家政学の2専攻）から出発し、1952年には文学部と家政学部の2学部体制となり、2024年からは国際文化学部と情報デザイン学部を新設し、現在は4学部（文学部、人間生活学部、国際文化学部、情報デザイン学部）⁴と2研究科（文学研究科及び人間生活学研究科／博士後期課程3専攻、修士・博士前期課程6専攻）から構成される。2024年度時点での学生数は約1900名強（大学院生含）である⁵。附属校としては幼稚園と小学校、姉妹校としては岡山市と広島市にそれぞれ中学・高等学校がある。大学は大都市圏ではなく地方の中核都市に位置するが、その入試難易度は全国的女子大学の中でも常にトップランク⁶を保持している。

学長は、1名の男性を除き、歴代シスターが就任しており、特に第3代学長の渡辺和子シスターは、1963年～1990年の37年間の長きに亘り学長を務めた⁷。現在の津田葵学長は7代目（2021～）であり、理事長（2017～）を兼任している。津田学長の専門は社会言語学で、とりわけ言語コミュニケーションに関する実証的な研究業績を積み重ね、大阪大学言語文化研究所時代には21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」をリードした。大阪大学を定年退職（2007）後、私立大学の常磐大学、さらにはカトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会日本管区長（2014-2020）を経て、2017年よりノートルダム清心女子大学の理事長に就任し、今日に至る⁸。後述するように、この津田学長がトランスジェンダー女性の受け入れを主導した。

この大学がトランスジェンダー女性の受け入れを始めたのは、全国で4校目、私学では宮城学院女子大学に続いて2校目、カトリック系女子大学は2024年現在、7校⁹存在するが、トランスジェンダー女性の受け入れ実施はノートルダム清心女子大学が最初となる。

以下、本誌掲載のインタビュー内容を基にその導入経緯を整理し、若干の解説を行なっていく。

シントンDCにあるTrinity Washington Universityも、この修道会によって創設された（Sister Columba Mullaly 1987, p.7 など参照）。現理事長兼学長の津田葵シスターは、このTrinity Washington University（当時 Trinity College）にて2年間、教鞭を執ったことがある。（「学長略歴」<https://www.ndsu.ac.jp/about/pdf/message.pdf>）

³ノートルダム清心女子学園の歴史については、次のサイトを参照した。（「大学概要」<https://www.ndsu.ac.jp/about/historical.html>）、（「理事長挨拶」<https://seishingakuen.ndsu.ac.jp/about/>）

⁴2023年度まで文学部と人間生活学部の2学部であったが、2024年度から国際文化学部と情報デザイン学部が新設され、4学部構成となった。「建学の精神」<https://www.ndsu.ac.jp/about/ideal.html#sec04>

⁵ノートルダム清心女子大学「情報公開」（https://www.ndsu.ac.jp/about/univ_infor.php）

⁶AERA ムック『大学ランキング』（朝日新聞）の2010年版、2020年版など参照。

⁷その著書、『置かれた場所で咲きなさい』（幻冬舎 2012年）はベストセラーとなった。

⁸津田学長の経歴については大学HPにある（<https://www.ndsu.ac.jp/about/pdf/message.pdf>）、業績については（<https://www.ndsu.ac.jp/about/pdf/message02.pdf>）、（<https://www.acoffice.jp/ndsuph/KgApp?resId=S000140>）。

⁹日本におけるカトリック系女子大学は、ノートルダム清心女子大（岡山）の他、聖心女子大（東京）、白百合

1. トランスジェンダー女性受け入れ議論に至る経緯

トランスジェンダー女性の受け入れについて検討が始まったのは、津田理事長が学長を兼任するようになった2021年度以降である。それまでに、朝日新聞によって女子大学のトランスジェンダー女性受け入れに関するアンケート調査（2017年）が行われ、お茶の水女子大学と奈良女子大学（2020年開始）、宮城学院女子大学（2021年開始）が受け入れを開始し、日本女子大学も受け入れ表明（2020年6月）を行っていたが、前学長の在任期には、トランスジェンダー女性の受け入れについての検討や教職員からの要望といった動きは見られなかった。また、津田学長は2017年より理事長であったが、大学へのトランスジェンダー女性の受け入れについて、何ら指示や要望を出すこともなかったとのことである。

大学の執行部が、トランスジェンダー女性の受け入れ検討を初めて耳にしたのは、2021年10月に開催された学長諮問会議における本保副学長（当時）からの提案であった。その提案の前に、津田学長（2021年就任）より本保副学長に対して、受け入れの検討を始めてはどうかとの意向が示され、それを受けて学長諮問会議での受け入れ検討の提案であったようだ。同時に、検討を行なうための委員会の立ち上げが了承された。トランスジェンダー女性の受け入れ議論を始める決定には、津田学長の意向と決断、リーダーシップによるところが大きい。

ノートルダム清心女子大学はカトリック教団によって設立、運営されている大学である。カトリック教会においては、トランスジェンダーに対して洗礼を行わないなど、その受け入れについては、旧来否定されてきた。しかし、社会における価値・認識が大きく変わっていく中で、カトリック教会内においても変化の兆しが見られるようになってきたが、様々な意見があり、定まった方向性が十分に示されているとは言えない。このような状況の中、カトリック系大学の中で初めて受け入れを決定したのがノートルダム清心女子大学であり、津田学長が受け入れの方向を指示し、それに向けての学内の受け入れ議論を促した意義は大きい。

2. 多様な学生受け入れ委員会の発足から公表まで

学長諮問会議においてのトランスジェンダー女性受け入れ検討の提案があった6日後の11月1日、「多様な学生の受け入れ委員会」が発足した。メンバーは本保副学長を長とし、学部長2名、社会福祉学が専門の中井俊雄准教授、事務局より大倉恭子氏、土師裕子氏の計6名であった。この委員会の発足は、学内において公表された。11月には早速、岡山大学大学院教授で性別違和やセクシャル・マイノリティに関する研究・支援の第一人者である、中塚幹也氏によるトランスジェンダー等セクシャル・マイノリティに関する講義をFD研修として実施するなどした。

「多様な学生受け入れ委員会」としての初めての会議は、発足から1ヵ月後の12月2日であり、その会議でトランスジェンダー女性の受け入れを2023年度から開始すること、ガイドラインの作成を進めていくことなどが確認された。委員会発足から僅か1ヵ月後にトランスジェンダー女性の受け入れを決定し、その受け入れ時期も、受け入れ決定から1年4ヵ月後とするなど、かなり短期の準備期間で受け入れることとなったのである。以後、この委員会を中心に具体的な準備が進められ、受け入れに向けて想定される課題やそれへの対応などが話し合われていった。

女子大（東京）、清泉女子大（東京）、藤女子大（札幌）、仙台白百合女子大（仙台）、京都ノートルダム女子大（京都）の7校である。長野の清泉女学院大は2019年より看護学部のみ共学化され、神戸海星女子学院大は2024年度から学生募集を行っていないので、この2校のカトリック系女子大学は含めていない。（安東編「女子大学統計・大学基礎統計」 <https://kyoken.mukogawa-u.ac.jp/statistics/>）

「多様な学生受け入れ委員会」で5ヵ月間の議論が行われた後、翌2022年5月の教授会で、2023年度よりトランスジェンダー女性の受け入れを決定した旨の報告が行われた。同時に、ガイドラインの制定もなされている。翌月の6月1日には大学HPで、“トランスジェンダー女性は「多様な女性のうちの一人」”であり、“自認の性（女性）で生きることを切望している人”であるとの認識を明示し、2023年度からトランスジェンダー女性を受け入れる旨の学長メッセージ（下図）を掲載した¹⁰。

ノートルダム清心女子大学は、本学の教育理念の実現に向け、自身の性自認にもとづき、本学で学ぶことを希望するトランスジェンダー女性（戸籍上男性であっても性自認が女性である人）を2023年度から受け入れることを決定しました。

トランスジェンダー女性は「多様な女性のうちの一人」です。出生時の性（戸籍の性）が男性であることに違和感があり、自認の性（女性）で生きることを切望している人です。

本学では、それぞれが自分らしく生きることができるよう様々な場面で、共生社会に向けての学びの機会をこれからも作って参りたいと思います。多様な一人ひとりが、あらゆる分野に参画し活躍できる社会の実現につながっていくことを期待しています。（略）

なお、在学生の皆様に対しては、多様な人々に関する研修会や講演会を定期的に行い、意識の醸成を図っていくことしております。

ノートルダム清心女子大学学長 シスター 津田 葵

この時、準備委員会の名称も「多様な学生の受け入れ委員会」から「多様な学生受入れ委員会」へと変更がなされた。同時にインクルーシブ教育研究センターのメンバーで、学生のみならず保護者との相談や支援も担当している青山新吾准教授（専門は教授特別支援教育）を新たに委員会メンバーに加え、より具体的な議論を進めていくこととしている。

HPへの掲載から2週間後の2022年6月15日には、本保恭子副学長よりプレスリリースを行い、「女性として自立して、自分を自分らしく生きていける教育環境を浸透させたい」¹¹とのメッセージを発し、トランスジェンダー女性の入学を可能とする入試要項の変更が伝えられた（大学院も同様）。

3. 「多様な学生受入れガイドライン」の策定

先述の通り、2021年12月の「多様な学生の受け入れ委員会」が開催されて以降、そのメンバーを中心に受け入れに関する「ガイドライン」の作成が始まった。トランスジェンダー女性の受け入れで先行する女子大学が公表している「ガイドライン」を参考に作成が進められ、5ヵ月後の2022年5月11日に「多様な学生（トランスジェンダー女性）受入れガイドライン」を完成させている。日本女子大学のガイドライン公表は2023年4月なので、2022年5月までにガイドラインが公表されていたのは、お茶の水女子大学（2019年5月28日）と宮城学院女子大学（2020年6月16日）の

¹⁰ 「学長メッセージ」2022年6月1日（https://www.ndsu.ac.jp/blog/article/index.php?c=blog&category=102&category2=&sort_type=DESC&tag=&q=&sk=15）。このメッセージは、2022年9月発行の『ND BULLETIN』Vol.208には、学長メッセージ「多様な学生の受け入れについて」が掲載されており、トランスジェンダー女性受け入れの方針が同窓生や保護者にも広く伝えられた。但し、この冊子発行は、トランスジェンダー女性の受け入れが同年6月に公表された後である。

¹¹ 例えば岡山放送では、「中四国初 トランスジェンダーの学生受け入れ ノートルダム清心女子大学」とのタイトルで、大学、大学院とも2023年度から受け入れる方針と、1ヶ月前までの連絡が必要であることを報道した。2022.6.16.

みであり（奈良女子大学の場合、「ガイドライン」を公表していない）、これらを参考に作成されたが、とりわけ私学の宮城学院女子大学のものを参考として作成したとのことである。

（１）「基本的な考え方」

「基本的な考え方」として、津田学長が6月1日に大学HPで公表したトランスジェンダー女性受け入れメッセージと同様の内容が記載され、そこでは「トランスジェンダー女性は『多様な女性のうちの一人』と規定した上で、「本学は、それぞれが自分らしく生きられる社会、多様な一人ひとりで構成される社会を目指していきます」と述べている。この「基本的な考え方」の最後に、「ただし、男性が自認を偽って入学するいわゆる『なりすまし』が発覚した場合、学則に基づき退学とします」との文言で締めくくられた。この内容は、宮城学院女子大学のガイドラインと同様の内容であり、他の女子大学のガイドラインには見られない。この表現になった経緯やこうした表現にした場合の問題（例えば、どうやって「なりすまし」を見分けるのか、あるいは性自認が変化するフルイド（fluid）とどう区別するのかなど）への対処について、インタビューでは十分に踏み込んで聞くことはできなかったが、意見交換をする中で最悪の状況を考えたとき、宮城学院女子大学のものと同様の表現になったようだ。これについては、大きな議論にはならなかったとのことであった。

フルイドについては、ガイドラインの「学生生活について」においても説明がなされている。「入学後に、性自認や戸籍がどのように変わっても、そのことを理由に退学になることはありません。本学はみなさんの卒業までの学びを支援します。」として、性自認の揺らぎが生じることは当然のことであるとの認識のもと、例え戸籍上、男性となってもその学生を支援していくことが明示された。他の女子大学のガイドラインでも、同様の見解が示されている。先述した「なりすまし」との区別については、個々の学生に寄り添って判断するとのことである。

（２）提出書類について

最も議論された課題は、診断書の提出を求めるかどうかであった。診断書については、これまで自身の性自認をカミングアウトせず、周囲に隠して頑張ってきた者も多くいるという実態を鑑みると、そうした診断書の提出を求めることはできないということで合意がなされた。さらに、アメリカ精神医学会の診断分類DSM-Vでは「性同一性障害」から「性別違和」へ（2013）、WHOの疾病分類ICD-11においても「性同一性障害」を精神障害から除外して「性別不合」とされる（2019）など、トランスジェンダーを“障害”の診断から外す大きな社会的な流れも後押しした。それでも「なりすまし」といった問題が生じた場合の保証として、誓約書のようなものの提出を求めようとの議論もなされたが、まずは申し出てきた学生を信じようとの結論に落ち着き、診断書はもちろん、誓約書やトランスジェンダー女性として過ごしていることを示す書類などの提出も求めないことになった。よって、必ず提出しなければならない書類などはない。

（３）出願前の事前連絡

ただ一点、必須として求めるのは、出願登録期間の1カ月前までに入試広報部へ連絡することである。ここで申請者と丁寧にコミュニケーションを取り、情報を得て、それを基に委員会で協議を行ない、最終的な受け入れの有無を決定するという流れとした。申請者とのやり取りの過程において、面談をすることも当然出てくるとのことである。これまで受け入れてきたインクルーシブの対象となる学生と同様、一人ひとり状況は大きく異なるので、それぞれの情報を注意深く聞き取り、その学生に応じたテーラーメイド（tailor-made）な対応策を築いていく段階と、この期間を位置づけた。トランスジェンダー学生が入学した後、大学生活において動揺することなく、心地よく普通に生活できるようにするために、事前にかなる準備、環境整備ができるかを第一に考えることを基本スタンスとしている。

(4) その他

上記以外に、次のような項目について説明がされている。「名前と性別の情報管理」では、授業や証明書等における通称名使用とその例外に関する説明、「授業について」では実技科目や更衣、授業での呼称について、「学生生活について」では多目的トイレの説明や健康診断、宿泊訓練、部・サークル活動などの説明がなされ、さらに「留学や実習」、「就職活動やインターンシップ」などにおける注意事項が記載された。とりわけ、就職活動については、条例の説明や産業界の状況など、他大学には見られない詳細な説明がされている。「カミングアウトやアウトティング」に関する項目では、それぞれの言葉の定義と当事者及び周囲の者それぞれへの注意喚起がなされ、ガイドラインの最後には学内外の「相談窓口」が掲載された。記載されている事項は、基本的に他女子大学と共通する。

4. 受け入れ決定後の学内における対応・準備

(1) 教職員や学生、同窓会への説明

2021年11月、既に「多様な学生の受け入れ委員会」が発足し、同月には岡山大学の中塚幹也教授による「LGBTQ / SOGIの基礎知識」と題するFD研修会が行なわれた。半年後2022年5月の教授会において、トランスジェンダー学生の受け入れ決定が教授会で報告され、この時点でトランスジェンダー女性の受け入れについては、学内で公的に共有されたのである。

インタビュー実施時点(2023年12月)において、制度的にはトランスジェンダー女性の受け入れは始まっているが、それまでに教職員、学生、同窓会とも特別に説明をする機会や意見聴取の機会が設けられていないとのことであった。教員には教授会で報告や説明はある程度されたものの、学生や同窓会にはHP等でのプレスリリースやガイドラインの公表によって伝わっているとのスタンスであり、この方針や対応に対して何らかの問い合わせ等があれば対応していくこととした。教職員や学生、あるいは学生のクラブ等からの意見や問い合わせについては、インタビュー時点では特段ないとのことであった。同窓会への対応については、同窓会全体を対象にした説明会などは行っていないが、年配の方が主に集る下部組織の同窓会で談話がなされた折、戸籍上は性別の変更がないとするなら男性が入学することになることから、「女子大ではなくなるのか」との問いがあり、これに対して出席していた大倉氏は今日におけるトランスジェンダーに対する見解を述べるとともに、「女子大学のままです」と答えたとのことであった。直ぐに納得してもらうことは難しいと思われるが、それ以上の質問はなかったようだ¹²。

(2) FD / SD 研修の実施、学生への啓発活動

教職員の理解を促すためのFDやSDについては、2021年中塚教授による研修会以降、コロナ禍ということもあって行なわれておらず、2023年度において教職員向けのFD / SDを実施する計画を立ててはいたが、諸事情によりペンディングになっているとのことであった。また、教職員や学生向けにセクシャル・マイノリティやトランスジェンダーに関する啓発動画を作成して配信する予定であったが、作成したものを詳細にチェックしていくなかで、「誤解を生む表現である」、「もっと慎重な表現にした方がよい」、「その認識は古い(更新されていない)」などの意見が次々と上がった

¹² 外部の団体から質問状が届いた。No!セルフID 女性の人権と安全を求める会が、2022年6月25日にノートルダム清心女子大学の学長と受け入れ委員会委員長宛に質問状を送付し、6月30日には受け入れ委員会事務局より、「参考にさせていただきます。ご意見をありがとうございました」との内容の回答を返している。

め、当該年度での公開は取りやめることになった。望ましい動画が完成したならば、教職員に配信する、あるいは授業等を通じて学生が視聴できるようにする予定とのことである。

残念ながら、教職員へのFD / SDの実施、学生への説明会や啓発活動については、予定通り進めることができず、十分に実施できてない実情がある。こうした状況では、自ら情報や知識を得ていこうとする者と、古いままの認識である者、関心がない者が混在することにもなる。今後も、性的マイノリティに関する知識や認識は更新され、アップデートされていくので、幅広く最新の情報や知識が教職員や学生に行き渡るようにしていくのが大きな課題であるとの認識が示された。

(3) 施設の準備

トランスジェンダー女性を受け入れるに当たり、施設面で大きな課題となるのは、更衣室やトイレである。更衣室であっても、しっかりした扉でプライバシーが守られる作りではなかったため、既存の多目的トイレを“みんなのトイレ”に変更し、そこにフィッティングボードを置くなどして対応した。

話し合いの中で、経済産業省のトランスジェンダー職員の裁判事例¹³が引き合いに出され、トランスジェンダー学生のみならず“みんなのトイレ”での着替えを要請することは差別になるのではないかとの議論もなされとのことである。そうした場合への対応も含め、女子トイレ内に1箇所、更衣室を設けることにした。こうした状況であるからこそ、事前に当事者と丁寧なコミュニケーションを取り、現状の説明をするとともに要望を聞き取り、それぞれに合った対応策を探っていくとのことである。

(4) その他

学籍簿や通称名の使用、学位記の記載名などへの対応については、これまでに通称名の使用に関する制度も整備されており、この受け入れに伴って特段、規則を変更することはないとの回答を得た。資格申請などに関することでは、管理栄養士資格等に対応してきた経験から、場合によっては戸籍謄本が必要となることもある旨を当事者へ丁寧に説明し、このような事態に対してどう対応したいか、どのような対応が可能かを話し合い、当事者が納得できる形に収めるというやり方を実践してきた経験が語られた。これまで積み上げてきたそうした経験・実績から、トランスジェンダー当事者についても同様の対応を行っていきけるとのことであった。

5. ノートルダム清心女子大学におけるトランスジェンダー受け入れ過程の特性

インタビュー内容を振り返り、ノートルダム清心女子大学のトランスジェンダー女性の受け入れについて、この大学の特性として感じたことが、大きく二点ある。それは、トランスジェンダー女性の受け入れについての検討の始まりから受け入れ決定まで、さらに受け入れ決定から実施までの期間の短さ、迅速さに関連している。一つは、津田葵学長（理事長兼任）の決断とリーダーシップであり、カトリック系のノートルダム清心女子大学の組織風土にも関係する。二つ目は大学において築いてきたきめ細かな学生への対応、小規模大学故に教職員間の緊密な関係性が構築されており、そうした学内基盤とこれまでの実績が、トランスジェンダー女性の短期間での受け入れを可能にしたのではないかということである。まず、津田学長のリーダーシップと組織風土について検討しておく。

¹³ 朝日新聞 2023.7.12 朝刊。「職場女性トイレ制限『違法』トランスジェンダー訴え 最高裁認める」この記事は、経済産業省のトランスジェンダー女性職員が省内の女性トイレ使用を制限したことを、最高裁判所第三小法廷が違法とする判決を下したとの内容を伝えている。

(1) 津田葵学長の決断、リーダーシップと大学のガバナンス

トランスジェンダー女性受け入れの決断は、学長の決断、指示によって行われたことが語られた。ただ、津田学長は学長就任以前より理事長（2017～）の職にあったが、前学長の就任時には理事長という立場からトランスジェンダー女性の受け入れについて意志表示はなされなかったことは既述の通りである。インタビューからは、前学長退任後、理事長との兼任で学長に就任するとすぐ、受け入れの方針を示されたことが分かる。

今回の決定が、カトリックの総本山であるバチカンの方針転換によるものかということ、そうではない。カトリック教会においては、トランスジェンダーの人々を受け入れるかどうか、洗礼を施すかどうかについて、旧来否定してきたが、社会状況・価値観が変化の中で、教会の捉え方にも徐々に変化が生じている。とは言え、まだ明確な方針が定められたという状況にはなく、否定・肯定双方の考え方があり、論争があるのが実情である。

前ローマ教皇のベネディクト（Benedict）16世（在任期間 2005-2013）は、LGBTQs の人々に対して否定的な考えをもっていたとされる¹⁴。今後、Gender Ideology¹⁵ がカトリック教会にとって大きな課題になると述べ、警戒をしていた。基本的にカトリック教会は、性的マイノリティについて厳しい態度を取ってきた。フランシスコ（Francis/Francesco）教皇（在位 2013～）となって以降、徐々にではあるがトランスジェンダーの人々に対するカトリック教会としての許容範囲を広げていくようになっていく¹⁶。2023年10月末ようやくバチカンで、ホルモン療法や性別適合手術を受けた人を含むトランスジェンダーのカトリック信者は、「信者の間に世間的なスキャンダルや混乱が生じる恐れがない状況であれば」洗礼を受けることができるとの文章を公開したにすぎない¹⁷。そうした公的文章が示される前の時点で、既にアメリカのカトリック系女子大学においても、トランスジェンダー女性の受け入れは進んでおり¹⁸、津田学長はこうした情報を把握されていたと思われる。

¹⁴ イギリスの人権擁護団体である Peter Tatchell Foundation は、ベネディクト教皇の葬儀に際して、1992年、彼が教皇庁教理省（Congregation for the Doctrine of the Faith）において、LGBT+ を悪魔として扱ってきたと述べ、当時の言説を引用し、批判している。“Pope Benedict demonised LGBT+ people” (<https://www.peteratchellfoundation.org/pope-benedict-demonised-lgbt-people/>)。また彼はその中で、「性的指向は人種や民族的背景などに匹敵する差別のない性質とはならない。これらとは異なり、同性愛指向は客観的な障害であり、道徳的な懸念を呼び起こすものだ」とも述べたとした。（https://www.vatican.va/roman-curia/congregations/cfaith/documents/rc_con_cfaith_doc_19920724_homosexual-persons_en.html）

¹⁵ 中村は「ジェンダーに関して語られたディスコースの累積により、特定の社会において歴史的に作りあげられてきた様々な女性性、男性性、無性性、両生性（ジェンダー・アイデンティティー）が体系づけられたイデオロギーを指す」としている。（2001, 115 頁）

¹⁶ 性的マイノリティの捉え方についての発言は、フランシスコ教皇においても紆余曲折があった。the European Academy on Religion and Society HP 2022.6.8.“Pope Francis sends mixed messages to LGBTQ+ Catholics” (<https://europeanacademyofreligionandsociety.com/news/pope-francis-sends-mixed-messages-to-lgbtq-catholics>)

¹⁷ Conor Murray Nov 9, 2023 “The Vatican Says Transgender Catholics Can Be Baptized” Forbes website (<https://www.forbes.com/sites/conormurray/2023/11/09/the-vatican-says-transgender-catholics-can-be-baptized>)。また New York Times 紙は、フランシスコ教皇が「トランスジェンダーの人々が洗礼を受け、名付け親となり、教会の結婚式で証人となることができる」と承認したことを明らかにしたと伝えている。（<https://www.nytimes.com/2023/11/09/world/europe/pope-francis-transgender-people.html>）

¹⁸ アメリカに 8 校あるカトリック系女子大学のうち、5 大学（Alverno College, Mount Mary Univ., Mount Saint Mary’s Univ., St. Catherine Univ., The College of Saint Benedict）は明確にトランスジェンダー女性の入学をウェブサイトで公表しており、2 大学（Trinity Washington Univ. & The College of Saint Mary）はウェブサイトにこそ明示していないが、受け入れていると思われることが記載されている。ただ、インディアナ州の Saint Mary College は 2023 年 11 月 21 日にトランスジェンダー女性の受け

また、津田学長はカトリック系大学ばかりではなく、国立大学法人の大阪大学や無宗教の私立大学においても教育・研究、管理運営に携わってこられた。社会言語学を専門とし、異文化コミュニケーションや多文化共生（大阪大学では21世紀COEプログラムの研究者代表）の研究に取り組みられた経験も少なからず影響を与えたのではないかと推察する。ただ、津田学長にインタビューすることができなかつたため、このような推察の形での表記となってしまったことを断っておく。

ともあれ、津田学長が示した方向性（トランスジェンダー女性の受け入れ検討）に従って、「多様な学生の受け入れ委員会」が発足し、その1ヵ月後に開かれた第1回委員会において、早々に1年4ヵ月後の2023年度からの受け入れを確認している。さらに半年後の教授会で、受け入れ決定の報告が行なわれた。極めて迅速に受け入れの準備が進められていったのであり、この点は、お茶の水女子大学や奈良女子大学の国立大学と同様であり、このケースの場合、学長（理事長兼任）が示した方針に従い実行していくトップダウン式のガバナンスが機能したようである。ただし、常にこうしたガバナンスが取られているかどうか、今回の調査から述べることはできない。

（2）テラーメイドでの学生対応の伝統と自負

繰り返し述べているように、トランスジェンダー女性の受け入れ検討の始まりから、決定、さらに実行まで、わずか1年半足らずのごく短い期間であった。教職員や学生らへの事前の意識調査や意見を募ることはなされていないとのことであり、さらにトランスジェンダーに関する説明会や研修についても、教職員に対する1度のFD研修を除いては、ほとんど行なわれないうまま、制度運用が始まっている。客観的に見れば、拙速、準備不足とも取られかねない工程であり、インタビューに答えていただいた方々も、そうした認識や懸念をもっておられた。そのような中で、何らかの問題や課題が生じたとしても、何とか対応できるであろうとの楽観的な姿勢を保持できたのは、これまでノートルダム清心女子大学が築いてきた教職員と学生との間のきめ細かな対応への自信であると捉えた。

インタビューでは、「本学の理念として、LGBTQなどセクシャル・マイノリティの方だけでなく、成績なども含めているようなことで悩んでいる学生を“誰一人も絶対に取り残さない”というのをスローガンに掲げており、教職員もそういう感覚であります」との語りがあった。その具体的取り組みの一つが独自のアドバイザー制度である。教員が学生一人ひとりのアドバイザーとなり、勉学や学生生活全般について諸々の悩みや問題について相談にのり、一人ひとりの学生に目配りができる体制を構築してきた。2000名程度の学生を擁する比較的小規模の大学であるからこそ可能であり、学生との間の信頼関係構築に自信を持たれている。アドバイザー制度の他にも、インクルーシブ教育センター（前身は2016年に開設された特別教育支援センター）を設けるなどして障害を持つ者を受け入れ、一人ひとりの状況に合わせてテラーメイド（tailor-made）の対応を充実させてきた実績がある。このテラーメイドという言葉が、インタビューの中で何度か語られた。マニュアル通りの一様な対応ではなく、学生個々が置かれた状況はそれぞれ異なるので、その学生の状況に合わせた対応、環境整備を構築していくべきとの姿勢の表れである。生じた問題や課題に対して、アドバイザーである教員が仲介するなどして教員職員間で、あるいはインクルーシブセンター、学生相談センターや保健サ

入れを表明したが、学生や卒業生、地域教区などからの激しい反対に遭い、翌月の12月21日に発表を撤回した。McDonald, M. 2024.2.16. “Almost All Catholic Women’s Colleges Admit Men Who Identify as Women.” NATIONAL CATHOLIC REGISTER HP. (<https://www.ncregister.com/news/almost-all-catholic-women-s-colleges-admit-men-who-identify-as-women>)

ンターといった部署との間で情報交換を行ない、密接な関係をもちながら対応をしてきた。もちろんそこには、福祉や心理等の専門知識をもち中核となる教員の存在があり、彼らへの信頼とこれまでの実績があるからこそ、予定していた準備が十分できていなくとも、受け入れ後に問題や課題が生じたとしても、何とか対処していくことができるとの自信につながっていると感じられた。

おわりに

日本の女子大学で4番目、私立大学では2番目にトランスジェンダー女性の受け入れを始めたノートルダム清心女子大学における受け入れ準備過程を、キーパーソンの方々に振り返ってもらった。

この聞き取り調査に臨むに当たり、筆者はカトリック系列の女子大学におけるトランスジェンダー女性の受け入れには、かなりの難しさが伴うのではないかと考えたが、そのような状況下において、シスターでもある津田学長が、この受け入れを方向付けたことが分かった。しかしながら、津田学長にその決断経緯や覚悟について直接、話を伺うことはできなかつたため、津田学長の関わり方についての検討を十分に行なうことができなかつたことは残念である。これに関する本稿の記述内容に誤解があったとすれば、責任は全て筆者にある。

日本の女子大学においては、なかなかトランスジェンダー女性の受け入れが進んでいかない現状がある。これまで受け入れを始めた女子大学での調査を踏まえて考えると、受け入れを方向付けるリーダーシップを発揮する学長がいること、それを支える専門知識をもった教員が周りにおり、サポートしていることを指摘できる。そうした動きの基盤には、旧来の枠に囚われず、今日において“女性”をどう捉え直すべきか、これまで排除されてきた弱者をどうサポートしていけるのかといった課題意識の共有があるように思う。こうした意識や理念の共有なくしては、旧来の常識や価値観を克服し、前に踏み出していくことは難しい。その一方で、上層部だけが理解し、旗を振って推し進めるのでは、トランスジェンダー学生を迎え入れた後で問題が生じ、傷つけてしまうことにもなりかねない。大学として受け入れ準備を進めていく過程で、できるだけ多くの教職員や学生たちに、正確な知識と情報、大学としての考え方・取り組みを周知するための方策と地道な努力が求められる。

引用文献

- AERA ムック 2009, 2019 『大学ランキング』（2010年度版・2020年度版）朝日新聞出版
安東由則編「女子大学統計・大学基礎統計」（<https://kyoken.mukogawa-u.ac.jp/statistics/>）
朝日新聞 2023.7.12 朝刊．「職場女性トイレ制限『違法』トランスジェンダー訴え 最高裁認める」
the European Academy on Religion and Society 2022.6.8.“Pope Francis sends mixed messages to LGBTQ+Catholics”（<https://europeanacademyofreligionandsociety.com/news/pope-francis-sends-mixed-messages-to-lgbtq-catholics>）
The Holy See（ヴァチカン教皇庁）1992.7.24. CONGREGATION FOR THE DOCTRINE OF THE FAITH（https://www.vatican.va/roman_curia/congregations/cfaith/documents/rc_con_cfaith_doc_19920724_homosexual-persons_en.html）
McDonald, M. 2024.2.16. “Almost All Catholic Women’s Colleges Admit Men Who Identify as Women.” *NATIONAL CATHOLIC REGISTER*.（<https://www.ncregister.com/news/almost-all-catholic-women-s-colleges-admit-men-who-identify-as-women>）
Murray, Conor 2023.11.9. “The Vatican Says Transgender Catholics Can Be Baptized” Forbes website（<https://www.forbes.com/sites/conormurray/2023/11/09/the-vatican-says-transgender->

catholics-can-be-baptized)

中村桃子 2001. 『ことばとジェンダー』 勁草書房

the New York Times 2023.11.9. Vatican Says Transgender People Can Be Baptized and Become Godparents. *The New York Times*.

(<https://www.nytimes.com/2023/11/09/world/europe/pope-francis-transgender-people.html>)

No! セルフ ID 女性の権利と安全を求める会 2022.6.24. 「ノートルダム女子大の『トランスジェンダー学生』受け入れに抗議します」 (<https://no-self-id.com/2022/06/24/> ノートルダム清心女子大の「トランスジェンダー」)

ノートルダム清心女子大学 2022.9. 『ND BULLETIN』 Vol.208

ノートルダム清心女子大学 website

「大学概要」 (<https://www.ndsu.ac.jp/about/historical.html>)

「建学の精神」 (<https://www.ndsu.ac.jp/about/ideal.html#sec04>)

「理事長あいさつ」 (<https://seishingakuen.ndsu.ac.jp/about/>)

「情報公開」 (https://www.ndsu.ac.jp/about/univ_infor.php)

「学長略歴」 (<https://www.ndsu.ac.jp/about/pdf/message.pdf>)、

「シスター津田 葵学長の業績」 (<https://www.ndsu.ac.jp/about/pdf/message02.pdf>)、

「学長メッセージ」 2022 年 6 月 (https://www.ndsu.ac.jp/blog/article/index.php?c=blog&category=102&category2=&sort_type=DESC&tag=&q=&sk=15)

「教育研究業績データベース」 (<https://www.acoffice.jp/ndsuhp/KgApp?resId=S000140>)

「多様な学生（トランスジェンダー女性）受け入れガイドライン」 2022 年 5 月 11 日制定

(<https://www.ndsu.ac.jp/life/support/pdf/transgender.pdf>)

岡山放送 2022.6.16. 「中四国初 トランスジェンダーの学生受け入れ ノートルダム清心女子大学」

(<https://www.ohk.co.jp/data/26-20220616-00000016/pages/>)

Peter Tatchell Foundation 2023.1.3. “Pope Benedict demonished LGBT+peop (<https://www.petertatchellfoundation.org/pope-benedict-demonised-lgbt-people/>)

Schiappa, Edward 2021. *The Transgender Exigency*, Routledge

Sister Columba Mullaly 1987, *Trinity College*. Chistian Classics

※ネット資料については、2024 年 11 月 30 日、全ての所在を確認した。

付記

本稿は、2020-24 年度科学研究費・基盤研究 (B) 「大学におけるトランスジェンダー学生の受け入れ課題：日米の女子大学事例を中心に」 (20H01639/23K20173, 代表：安東由則) による成果の一部である。

Commentary and Discussion on Interviews Concerning the Acceptance of Transgender Students at Notre Dame Seishin University

ANDO Yoshinori¹⁾

Abstract :

In addition to providing some commentary and supplements to the interview transcript conducted at Notre Dame Seishin University in December 2023 (published in this issue), we had some discussion on the significance of the decision by a Catholic Church-affiliated women's university to accept transgender women.

From the 2023 academic year, Notre Dame Seishin University, affiliated with the Catholic Church, began accepting transgender women and implemented the decision in a short period and at an early stage in Japan. While the Catholic Church has generally had a harsh attitude toward transgender people, it was due to the leadership of President Aoi Tsuda that made it possible to proceed so quickly. In addition, the university has had a tradition of meticulous attention to each student, and they are proud of our ability to meet such a new challenge.

However, there seems some issues in terms of whether the university has adequately prepared in advance for transgender-related training and opinion hearings for both faculty and students, as well as university policies and measures to be taken after admission.

Key Words : transgender student, leadership of university (college) president, Catholic Church-affiliated universities, tailor-made responses to each student

1) Research Institute for Education, Mukogawa Women's University, Professor